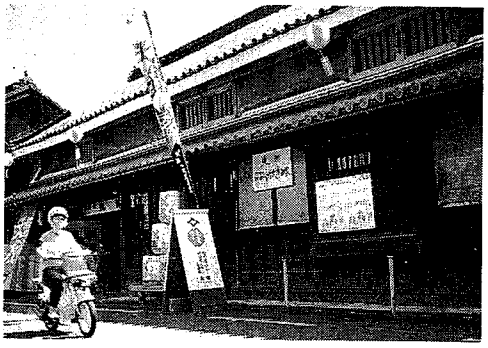
シリーズ 史実に見る酒癖

「満濃池」修築に献身

農民救済に生涯を捧げる

▼丸尾本店、江戸時代の建物



小誌No.26（'92夏号）の拙稿で讃岐琴平が生んだ幕末維新の俊英・日柳燕石を取材し掲載した。勤皇思想に共鳴し、酒を浴び、詩文にふけり、高杉晋作らと気脈を通じて国事に奔走した異色の侠客燕石の劇的な生きざまは、ほとんどの作者が題材としていない素材だったせいか、読者から好評を得た。

その中で、燕石に惜しみなく経済支援を続け、日本一の灌漑用溜池「満濃池」の修築に生涯を捧げた長谷川佐太郎翁の家業酒造業を今に受け継ぐ㈲丸尾本店から書簡と、長谷川翁に関する資料が届けられた。

資料によると、同社々屋は当時のままで、晋作ら勤皇の志士を匿ったカラクリの床の間や密談の部屋が現存されているとあった。燕石を取材したお陰で拙稿に格好の新たな素材が眼前に蘇ったのだ。有難いことである。欣喜し、昨秋、再度琴平に走った。折しも再訪した日、街は「天領榎井日柳燕石まつり」の日であった。燕石が長谷川翁を教えてくれ、長谷川翁がさらに燕石を身近にしてくれた。これも奇縁である。

（藤原記者）

金毘羅の俊英酒造家
長谷川佐太郎

佐太郎の生家は酒造家

清酒『凱陣』の㈲丸尾本店を訪ねた昨秋九月末、金毘羅宮参道から東へ約一キロの榎井の町は、「天領榎井・燕石まつり」の最中だった。訊くと、今年で二年目だという。道理で一昨年夏、燕石取材で琴平に訪れた時には、まつりのことを聞かなかったはずだ。町の通りには幟が立ち並び活気があった。榎井が生んだ幕末維新の俊英、日柳燕石を前面に押し立てることで〝町おこし〟を狙った企画である。燕石とゆかりのある町の寺院や神社、妾宅呑象楼、墓所や丸尾酒造を巡るスタンプラリーや、馬乗の燕石を中心にした官軍装束のパレードがまつりを盛り上げる。明治元年に北越征討の途で病に倒れ、越前

▲「天領榎井・燕石まつり」の官軍パレード風景。背景の建物は㈲丸尾本店。

柏崎で不帰の客となった燕石が、郷里榎井に凱旋したーとの仮説で行われるもので、当の本人は草葉の陰で苦笑いをしているのではないか。

いずれにせよ、こうした企画で改めて燕石がクローズアップされるのは歓ばしいことである。現実に一昨年の第一回目のまつりで燕石を知ったという町民が多いほど隠れた存在だから。琴平の人に「町と縁のある歴史上の人物は?」と尋くと、ほとんどの人が「森の石松」と応える。冗談じゃない、森の石松はあくまでも架空の人物だ。広沢虎造の浪曲や映画等で「清水次郎長親分の代参で金毘羅に詣り、その帰途、騙し討ちに遭って殺された」お馴染みのストーリーは、大酒飲みで、気短かで、オッチョコチョイという石松の人間像と殺戮シーンの凄惨さが売り物になって強烈なイメージを残しているようだ。

しかし、日柳燕石にしても本編の長谷川佐太郎にしても現実に琴平あるいはその近隣で生まれ、史上に輝やかしい足跡を残した人物であることを忘れてはいけないのではないか。歴史は風化するというが、それを許してはいけない。史実を正しく後世に伝え、心に刻むことが私達の務めではないだろうか。

丸尾本店の丸尾忠男(75)、美都子(70)夫妻は、まつりで忙しい中を温かく迎えてくれた。とくに美都子さんからは、燕石を採り上げて以来、何度か手紙を貰っている。その一通にやはり小誌No.25で書いた「平賀源内」の生誕地同県志度町の出身で、源内の銅像除幕式に当時小学校六年生であり、学校代表として参列したと記されていただけに、さらに奇縁を感じていたせいか初対面とは思えなかった。

▲佐太郎を語る丸尾夫妻

丸尾夫妻には江戸末期からそのままだという居間や高杉晋作らを匿ったというカラクリのある床の間の客間を案内して貰ったが、その間、ずっと二人の口から「佐太郎さん」という言葉が出た。考えてみれば当然なのだが、その言葉のニュアンスに、まるで親戚か友人のような親しみが滲み出ていて、時を超えてほのぼのとしたものを感じさせられた。

長谷川佐太郎(一八二七~一八九九)は、文政十年に榎井村(現在の仲多度郡琴平町榎井)に生まれた。生家は二千石の豪農で多くの田地を持つ傍ら酒造業・新吉田屋を営む古い家柄であった。家が経済的に恵まれていたので幼少の頃からさまざまな学問を身につけることが出来た。商人としての基本である読み書き算盤はもちろん、古文から建築学、平方根・立方根を求める数学まで学問の幅は広かった。

家が近いということと、家業が質屋・加島屋である。十一歳年上の日柳燕石と親しく、兄のように慕っていた。

燕石も何不自由のない身であったが、しだいに勤皇思想に共鳴し、「家貲蕩尽すれど、毫も顧惜せず」と嘯き、後に長州の高杉晋作が「子分千人許りもあり、学文誌賦も腐儒迂生のおよぶに非ず。実に関西の一大侠客に御座候」と賞賛する存在となった。

それだけに相当資金を必要としたのか、佐太郎に経済支援を求めている。また、佐太郎も燕石の信条に惹かれ、惜しみなく支援を続けた。

このように両人が比較的自由な行動がとれたのも、当時、榎井村は備中倉敷代官の所管であったとはいえ天領地(幕府の直轄地)で、封建

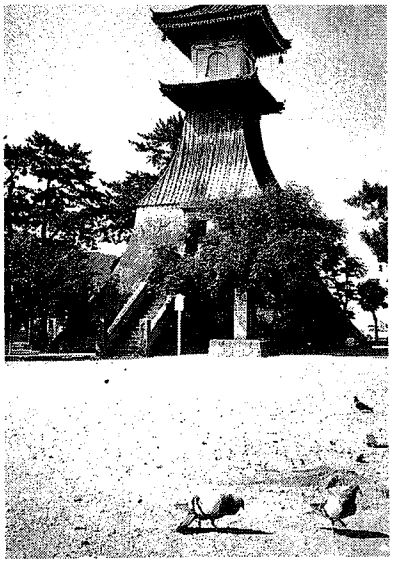
的な締めつけがゆるやかだったからでもある。

高杉晋作を酒樽に匿う

佐太郎はこうした空気の中で自由闊達に育った。よく番頭について村内を巡回視察したが、番頭が小作人を励ます言動を見て、自然に人に対する優しさ、思いやりを身につけた。また、同家では全国から金毘羅詣りに来た人の中で帰りの路銀に困っている人がいれば連れて帰り、酒や食事から金品を与えた。しかも無条件で与えたのでは当人のプライドを傷つけると配慮し、家屋の柱や床を磨く仕事を与え、その代償とした。今も丸尾本店に残されている当時の佐太郎の居間の梁は、まるで黒檀のように光っている。

こうした思いやりの深い環境が佐太郎の人間形成に与えた影響力は大きい。

思いやりが深く、正義感が強い佐太郎だったが、経済的に何不自由ない酒造家の嫡男だけに周囲は女中や下男に囲まれ、「佐太郎坊ちゃま」「坊ちゃま」と寵愛されただけに自分の身の回りのことは何ひとつ出来ない過保護っ子でもあったようだ。



▲慶応元年に建った日本一の高さの灯籠

丸尾氏の妻美都子さんは同家に嫁いで来た頃、義母のサイさんから「佐太郎さんの未亡人田鶴子さんが『男を甘やかしたら結局自分のことは何も出来んようになるなァ。主人は優しくていい人でしたが、あんなに手のかかる人も珍しいわ』とこぼしていた」と聞かされたという。

また、丸尾氏は「燕石が勤皇思想に傾倒した右派人間であるのに対し、佐太郎さんは当時珍しい民主的人間」と語っている。

その燕石の影響を受けた佐太郎は、ときには丸亀、高松藩の政治について批判的になり、農民たちの困窮を目撃してから義憤が公憤となった。そうした正義感が燕石に支援を続ける動機となったようだ。

燕石は妾宅を「呑象楼」と名づけ軒昂たる意気を示したが、ここに身を寄せる志士は多かった。長州の桂小五郎らも何度かこの「呑象楼」を訪れている。拙稿「日柳燕石」でも書いたが、呑象楼とはここの二階で酒を呑めば、盃に金毘羅宮がある象頭山がポッカリと浮ぶところから〝象頭山を呑む〟という意味。風流である。

慶応元年（一八六五）五月、高杉晋作は馬関（下関）の開港を唱えたため幕府から追われた。難を避けて道後を経て燕石を訪ねた。とはいえ、愛人の馬関芸者おうのを連れて半分は物見遊山の逃避行でもある。暫くは呑象楼に匿っていたが、やがて捕吏の手がのび、燕石は佐太郎に晋作の身柄を預けた。

佐太郎宅での晋作は昼間は人目を忍んで部屋にこもり酒を飲み、おうのの三味線に合わせて得意の都々逸をうなっていたようだが、夜になると待ちかねたように参道近くの色街に出かけるといったいい気なものだったとか。

現在、丸尾本店には当時の部屋がそのまま残されている。佐太郎が使っていた七畳半の居間の天井裏は、ちょっとした細工で縄梯子が降りてきて数人が隠れられたし、客間の床の間は変哲もないが、押入れの横に通路があり、ここを通じて床の間の裏に三、四人が隠れられるカラクリが設けてある。

ある日、晋作が匿われていることをかぎつけた捕吏が押しかけ、佐太郎の妻田鶴子の髪を引っぱりまわして晋作の行方を尋ねたが、田鶴子は一言も漏らさなかった。晋作は危うく酒樽の中に身をひそめて難を逃れた。後で帰宅して事情を知った佐太郎はほっと一安心し、「ぬれものは無事に届いてしぐれけり」と詠んだ。その短冊は今も丸尾本店にある。

後に晋作を庇護した咎で燕石は高松藩の牢獄に投ぜられた。その間燕石は烈々たる勤皇心を燃えたぎらせ、獄中の志士を激励し、『皇国千字文』を著わして国体の尊厳を説いた。燕石が獄中の間、佐太郎は燕石の家族の経済面での面倒をみたり、何度も面会に訪ねている。

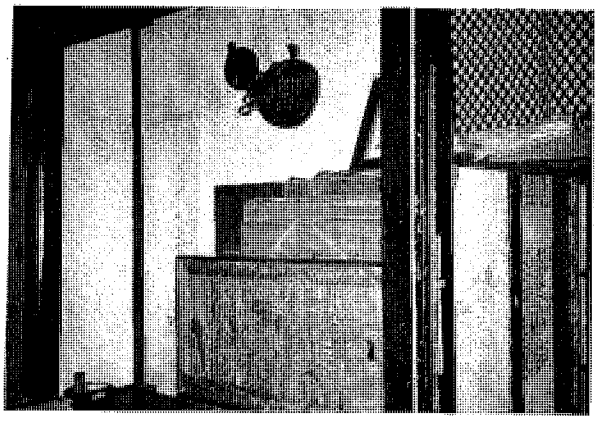
農民の窮状を直訴す

「讃岐三白」といわれ、当時の讃岐は良質の

米、塩、綿の産出は全国でも知られていた。とくに米の生産はすぐれていたが、それは讃岐の気候が高温で雨量が少なく、そのうえ山が浅いので古くから各地に農業の灌漑用水に溜池が多く、水の便がよかったことが背景にある。

その中でも堤高、灌漑面積、貯水量とも全国一の満濃池（現在の仲多度郡満濃町）は有名だ。満濃池創築については、『今昔物語』に「弘法大師がその国の衆生を救けるがために築き給へる池なり。龍の棲むとして有りける」と記されているが、これは全国に多い大師伝説のひとつで、実際は大宝年間（七〇一～七〇四）に国守道守朝臣が築いたものを嵯峨天皇の弘仁十二年（八二一）に勅許により弘法大師空海が築池別当として池の修築にあたったという説が正しいようだ。ちなみに弘法大師は琴平町に隣接する善通寺市が生誕地であるだけに、弘法大師が築いたという俗説の方がもっともらしく聞こえてくる。

佐太郎が二十八歳の安政元年（一八五四）七月、何日も激しい雨が降り続け、この満濃池が決壊し郡内の村々が水びたしとなり、青田は一瞬にして泥沼と化した。その後はそれでなくても雨量が少なく、降ったとしても溜める池がないとあって郡内の田畑はひび割れ、稲穂どころか雑草すら生えない状態が続いた。



▲高杉晋作らをかくまったカラクリ押入れ。当時のままである。

村の庄屋や長老たちは何度も協議を重ね、農民たちは疲弊しきっていた。

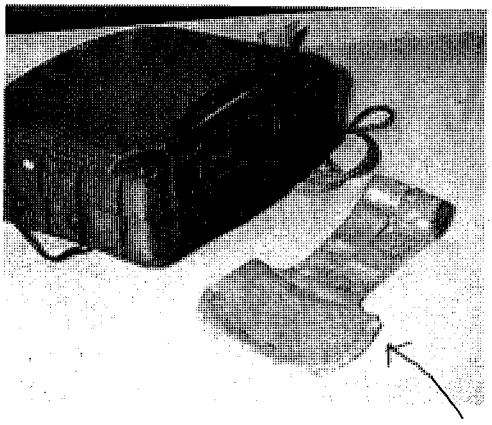
「井戸も掘っただ。老いも若きも夜を徹して水を汲んだがもう一滴の水も出ねえ。これ以上は体がどうにもならん。神や仏に慈雨の恵みを乞うたものの、頼りの雨も降らん。…どうしたらいいんだ。それでいて藩の年貢取り立ては厳しい。年貢米どころか、わしたちは芋や粟はおろか野の草で飢えをしのいでいるというに…。お上は何故救けてくれぬのか」

安政の破堤後、十四年間も放置されたままで

あった。佐太郎はこの窮状を見かね直訴する決意を固めた。時は慶応四年（一八六八）三月、満濃池堤防再築願いを携えて上京、弁事伝達所に嘆願した。

「満濃池は千年の昔から古事に出ている名池である。しかるに十四年前、池の堤が切れてからは、空しくそのまま廃池となった。この池の水掛りの高は三万五千石、そのうち二千百八十石は天領の榎井、五条、苗田の三村でその他は高松、丸亀、多度津の三藩の領地になっている。この池が役立たなくなって以来、三村の百姓は用水の手だてもなく、五穀の種付けにも困り果て、ひでりの年には全部の村々が赤土となってただの一粒も育ちませぬ」

切々たる佐太郎の嘆願も国事多難を理由に顧みられなかった。国には国の事情があった。堤防が決壊した安政元年といえば、米国使節ペルリが浦賀に上陸、さらに翌年には七隻の鋼鉄製軍艦をひきいて江戸湾に上陸し、強固に開国を迫り日米和親条約を締結した年だけに、十四年経過したとはいえ、国は軍備に追われ溜池の修築に要する資金がなかったのである。



▲修築工事の現場に佐太郎が携帯した弁当箱と早道（はやみち）

村に帰った佐太郎は農民たちに誓った。

「必死の思いで直訴におよんだが、聞き入れては貰えなかった。今まで皆の衆の酒米や池の伏流水のお陰で見事な酒が造れたというのに、わしは何ひとつ手助けが出来ぬとは…。だが、わしは諦めんぞ、何度も何度でも上京し直訴を繰り返す。その誓いとしてわしは今日から満濃池修築が終える日まで好きな酒を断つ。どうしても国が駄目だというなら、わしの身上をはたいても池の修築をする。それも二度と決壊しない立派なものに！」

佐太郎の頬に涙が伝わった。農民たちも泣いた。佐太郎はその後私財を投じて再三上京し、農民たちの窮状を訴え続けた。熱意が通じ、ついに七ヵ月後にやっと大政官の許可をとりつけることに成功した。大政官は関係藩県へ満濃池修築を申し渡したのである。

ところがさらにひとつ問題が起った。満濃池の水利は高松、丸亀、多度津三藩の領地と榎井ら天領地の四ヵ所に分かれ、各々利害が相反し、いざ出資の段になると意見の一致をみることが難しく、着工はいつのことか判らぬ状態となった。

「大政官が修築を命じてもこんなことじゃいつまでたっても堤防は出来やしねえ。どこまでわし　百姓を馬鹿にするんだ。これ以上辛棒出来ねえ、一揆しかねえ！」

農民たちの怒りは爆発寸前だった。佐太郎は農民たちの怒りをしずめるために日夜奔走した。

「辛棒だ、辛棒するんだ！　せっかくここまで話が進んだんじゃないか…。もうひと息だ。わしはこれからも何度も各藩に足を運んで統一を図るよう懇願する。もう暫くの間わしに免じて辛棒してくれ」

佐太郎の悲痛な叫びに農民たちは歯を喰いしばって堪えた――。

今も脈打つその心意気

明治二年、高松藩執政・松崎渋右衛門、倉敷県参事・島田泰雄らの同意を得て、高松藩がその工事にあたることを公表した。同九年、ついに着工の日がきた。松崎の提唱により木閘（ちゆる）を使用すれば、これまでのように約三十年ごとに改造が必要となるため、池の北端にある自然石で樋管を作ることになった。

しかし、この工事半ばにして一部の藩吏の間から「巨石に穴を掘るなどとは至難だし、資金的にも困難だ」と、反対の声があがった。佐太郎は、

「三十年ごとの改造などは、仏作って魂入れずに似ている。万一、石穴が成功せぬ時は私が腹をかき切ってお詫びつかまつる。貯水の時期が目前に迫っている今こそ決断の時ですぞ！」

と、何度も請願、その結果、予定通り工事は

進められた。

昼夜兼行で工事は進み、念願叶って満濃池堤防修築工事が完成したのは、明治九年六月のことであった。「やった！　やっと堤防ができたぞ！」―農民たちは歓喜の涙を流した。

記録によると修築工事に従事した人夫は延べ十四万五千人、請願費、各藩紛争調定費、工事人夫奨励費など合わせて資料に明確なものだけでも二万八千円が費やされ、その上、佐太郎は私財を約二万円投入している。明治九年頃の二万円が今の貨幣価値に換算するとどれぐらいになるのか？

『値段の（明治・大正・昭和）風俗史』（週刊朝日編）から〝日本酒〟を引用すると、上等酒一升四銭（明治七年）に対し、現在の上撰酒千七百八十円であるから約四万五千倍。大工の一日の手間賃四十銭（明治七年）に対し、現在は二万五千円であるから約六万二千倍、物価によって一概にいえずその平均値として約五万倍として十億円前後という巨額になる。

燕石への政治献金、さらにこの重い負担で佐太郎は完全に財産を使い果たした。後に明治二十八年に丸尾氏の曽祖父忠太氏が佐太郎から家屋敷、酒造の権利から諸道具一切を譲り受けた。当時の売買契約証が今も丸尾酒造にある。その証書には「一金九拾圓也」と記されている。先の貨幣換算でいくと四百五十万円程にしかならない。その事情について丸尾氏は「実際はもっと巨額だったんでしょうが、以前から忠太が佐太郎に融資をしていたので、その精算分の金額だと思います」と推測している。ちなみに丸尾家は先祖代々、現在の瀬戸大橋の眼下にある与島で廻船問屋を営んでいたとか。

家屋は丸尾家に譲られたものの、たちまち佐太郎夫婦は住む家に困るとあって、離れ座敷を借り受けて住んだ。先の晋作が酒樽に隠れて難を逃れた一件などは、この時分、田鶴子が話を聞かせたものである。

私財を全て投入し満濃池修築に献身するとともに勤皇家としても尽した佐太郎に、明治二十八年、満濃池水利組合の推薦で有功記念章が贈られて、三百五十人が参加し慰労会が催された。

▲今も満々と水をたたえる日本一のため池「満濃池」

その席で毎年五十円ずつを佐太郎に贈り、その労をねぎらうことになった。また、大正四年人々は佐太郎の功績をたたえ松崎神社（松崎渋右衛門を祀る）に合祀し、昭和六年十二月に長谷川佐太郎翁頌徳碑を池畔に建立し、永遠にその徳をしのんだ。

丸尾家の離れ座敷でわびしい暮らしの佐太郎夫婦―。今は女中も下男もいない、年老いた二人だけである。

「…あんさん、何もかも失うてしまいましたね。私はご先祖様に申し訳がなくって…」

「お前には苦労をかけるなァ。だが、これでいいんだ。どうせ人間生まれた時も死ぬ時も裸じゃないか。燕石さんも晋作さんも亡くなった今、わしは思い残すことは何ひとつ無い。酒は忠太さんが継いでくれるし、満濃池もあんなに立派になったじゃないか…。わしの財産がお役に立てて本望だ。あの世へ行ったら、わしからご先祖様にお詫びをするさ」

――長谷川佐太郎翁は、明治三十一年一月七日、七十二歳で不帰の人となった。今も象頭山の麓、榎井で眠りつづけている。

満濃池に足をのばした。満々と水をたたえた池面に、まだ紅葉には早い樹々が影をおとして映えわたっていた。

暖衣飽食の現在、人々は己の利得のみに狂奔する。こうした今、農民のために全財産を捧げた佐太郎の生き方は、あまりにも眩（まば）ゆい。

（参考図書／四国新聞（昭和57年3月21日）「讃岐人物百景」＝丸尾本店提供、末尾ながら取材に際し㈲丸尾本店からの温かいご協力に感謝いたします。）